

生物学的に見た「魯山山行」の熊

荒木達雄

一、動機と方針

昨年度に行われたゼミの中で、「魯山山行」を扱ったことがあった。この詩を読んだ際に、その解釈をめぐる様々な意見がかわされたのであるが、その中に、「熊」の扱いというものがあった。「扱い」と一言に言っても、それは大きく分けて二種類考えられる。つまり、作者（梅堯臣）ら当時の詩人達が熊をどのような存在として捉えていたのか、即ち詩に「熊」を登場させることが作品にどのような効果を及ぼすのか、がひとつ。もうひとつは詩に出てくる「熊」の行動は実際の熊のそれと照らし合わせてどうなのか、ということである。後者に関しては詩を読解する上でそれほど重要なこととは思われない節もあるのだが、本ゼミ中では「熊升樹」に関して、「熊は木に登るのか」など、激しい議論が行われた上で、結論は先送りという形になったという経緯があるだけに、報告する必要性が生じたのである。

本レポートではまず「魯山山行」に現れる熊の生態を生物学的に確定したい。つづいてそのような生態の熊が当時の人にどのように認識されていたか、ひいては詩に出てきた場合にはどのような印象を与えるのか、を推測していきたい。これは一見他レポート、「熊のイメージの分析」と重なる様ではあるが、そちらは当時の知識人の詩文中に現れる「熊」のイメージ、当方は基本的には生態を根拠にした推測であり、性質は異なるもので、むしろ二方面からのアプローチという形になるものと期待している。

生態を根拠にイメージを推測していくことの意義についても述べておきたい。「熊」に限らず、詩に出てくるものは何らかの特定の効果を引き起こすために使われている可能性が高い。たとえば本ゼミで出た、「日本人としては『熊は怖いもの』という印象がある。中国でも同様の印象があるのならば、作者もそのことが詩の鑑賞に影響を及ぼすこ

とを予測し、期待して『熊』を持ち出している」という意見がそれに近いだろうか。それらのイメージは使われるにつれて詩に独特のものとなっていくものなのかも知れないのだが、やはりもとのイメージを保存している面もあるろう。詩はその場に実際に居合わせない人にまで、光景から雰囲気までを伝えなければならぬのだから、一定のリアリテイを持つていなければならぬと思う。作者ですら実際にはそのような場に遭遇せずに、想像で詩作をする場合においても、あまりにも不自然なことを書くわけにはいくまい。読んだ人誰もが自然に受け入れられるリアリティを持ち、かつ実際には存在しない空想の世界を描くのが詩人なのではなからうか。敢えて悪い言い方をすれば、「見てきたような嘘を言う」のが詩人であると私は思うものである。

少々内容がそれだが、前記の理由により、詩には関係のない、実際の熊を調べること、詩の理解にある程度の助けとなると確信している。

二、熊概説

「クマ」は食肉目の一科であるクマ科の総称。五属七種あり、北極海沿岸からユーラシア大陸、北アメリカ、熱帯ジャングルまで生息する。肉食獣に分類されるが、基本的には雑食性で、種によつて肉食の傾向には差がある。アザラシを主食とするホッキョクグマや、ヒグマは動物食の傾向が強い。視力はあまり良くなく、嗅覚、聴覚に優れる。大型、小型の二つに大きく分けることができ、前者にはホッキョクグマ（八百kgを越すものもある）、ヒグマ、アメリカグマが、後者にはメガネグマ、ツキノワグマ、ナマケグマ、マレーグマ（小さいもので体重二十七kgほど）が分類される。これらのクマはそれぞれ生存に適した環境が異なり、当然生息域も異なる。よつて魯山に生息していたかもしれないクマについて知るには、まずその環境を知り、その環境に相応しい種類のクマを特定しておく必要がある。⁽¹⁾

三、魯山の環境

三、一 地理的条件

魯山は現在の河南省魯山県の東9 kmにあつた山。露山とも呼ばれた。以下、魯山周辺の地勢をまとめる。⁽²⁾ 河南省は全省の面積のうち、山地が26%、丘陵地が18%、平原・盆地が56%を占め、全体的に西高東低の地勢を示している。西方の山岳地帯から、東方の黄淮平原（海岸へ向かつて広がる華北平原の一部）へかけて扇状に開けてゆき、魯山はその途中、丘陵地帯の東端に位置する。魯山の西方約120 kmの地点に標高2192 mの老君山があり、そこから東へ向かうにつれて下がってゆく標高は、魯山周辺では200 mかそれ以下までになる。私が見た地図には（県名ではなく山としての）魯山の標高は明記されてはいなかったが、地形や等高線などから推測するに魯山自体もそれほど高い山ではなく、丘陵から平原への境界近くにある小高い丘といったところではないか。標高は3000〜4000 m程度か。『漢書』地理志では魯山は高く聳え立つ山のように書かれている、と謝氏は報告しているが、これも矛盾しているわけではない。先に記したように標高2000 m級の山は西方に100 km離れているし、北方も50 km以上離れたところでないといふ500 m級の山地に行きつかない。周辺に魯山以上の標高を持つ山がなく、比較的なだらかなところがあるのであれば、周りから1000〜2000 m程度突出しているだけでも目立つし、「聳え立つ」という認識を持たせるには十分であろう。

なお、これは現在の魯山についてはあるが、魯山周辺は黄河からある程度離れており、黄河の数度にわたる河道の変化やそれに伴う浸食、黄土の堆積の影響も受けていないことから、約1000年前の地形も現在のものに近いまなした。

三・二 気候的条件と植生

続いて魯山周辺の気候について考える。気候はそこに生息する動物を規定する重要な要因の一つであるだけではなく、気候を確定することによって初めて、これも重要な要因である植生を考えることができるためでもある。⁽³⁾

魯山の位置する河南省は熱帯モンスーン気候に属する。その特徴は夏と冬との間で風向の交替、気温差、降水量の差がはっきりとしていることである。河南省は温帯（暖温帯）から亜熱帯に属す。冬は寒冷で降水量が少なく、夏は非常に暑くて降水量が多い。年平均気温は12〜16℃で、一月の平均気温はマイナス3℃〜3℃、七月のそれは24℃〜29℃である。気温はだいたい、東高西低、南高北低の傾向にある。降水量は年平均500ミリ〜900ミリで南部、西部の山地では比較的多い。降水量の50%は夏季で、魯山では一日に329・4ミリという、河南省での一日の最大の降水量を記録したことがある（一九五七年七月六日）。植生分布では亜熱帯常緑広葉樹林区から温帯落葉広葉樹林区にあたる。魯山はこの境界に位置しているのだが、垂直方向（標高）による気候変化（植物の垂直分布）を考慮に入れて、前項でまとめた地勢状況を見ると、後者に属するとした方が適当であろう。⁽⁴⁾ただし、そこにある植物に関しては、同じ温帯であつてもブナ類とナラ類の多い日本の落葉広葉樹林と異なり、ナラ類（特にコナラ属）が優占種となる状態が極相となつていて、そこにアカマツなどの針葉樹が混ざるなど、雑木林となる場合もある。これは日本の温帯よりも河南省は冬季の気温が低いために、強い耐寒性が必要なことや、日本の温暖湿潤よりも雨量の少ない、やや乾燥した半湿潤気候であることも関係している。⁽⁵⁾

三・三 『魯山山行』当時の魯山

三・二では現代の状況についてまとめた。しかし、「魯山山行」を読む上での資料とするには、ここからさらに詩作当時の状況を推測していかなければ資料としての価値は半減してしまうと言わざるを得ない。

中国、河南省の歴史的な気候や植生の変化について触れた資料は残念ながら未見であるため、『地球温暖化を考へる』(宇沢弘文／岩波新書／一九九五年)より、地球規模での歴史的な気温変化のデータを用いる。これによると地球の平均気温は十一世紀のはじめ頃から徐々に上がりはじめ、十四世紀頃まで、現在の平均気温よりも 0.5°C 〜 0.6°C 高い状態が続いたとのことである。「魯山山行」が作られたのは十一世紀初頭のこと。ちょうどこの気温上昇の開始時期に当たる。河南省がこの気温上昇の例に漏れていなければ、現在の平均気温よりも 0.3°C ほど高かったことになる。この時魯山は現在と同じ温帯で落葉広葉樹林(夏緑樹林)または落葉広葉樹林と針葉樹林の混交林であったか、あるいは亜熱帯が北進して常緑広葉樹林(照葉樹林)となっていたかもしれない。しかしその二百年前までは現在と同じ気温、それ以前はより低い気温であったのであり、植物群落の遷移⁽⁶⁾にかかる期間を考慮に入れれば、どちらにせよそれほどはつきりとした極相は示さず、混合林であり、雑木林のような状態だったのではないか。

四 魯山の熊

四.一 魯山に住む(可能性のある)熊とは

前項までにまとめた情報と、二で扱ったクマの生態に関する資料などを合わせることで、当時魯山にいたと思われる熊について考える。前述のクマ科のものうち、亜熱帯・温帯の森林に生息するのは小型のクマに分類されるものであり、中国ではツキノワグマがそれにあたる。ツキノワグマはもとヒグマと同一の、森林に生息する種であったが、第三紀(約六千五百万年前〜二百万年前)の終わりに森林植生の分布域が南下したことにより、その変化にに応じて、草原の暮らしに適應していったヒグマと、森林に残ったツキノワグマとに分化がはじまったのであるという。現在ヒグマは北部の草原地帯、中国で言えば東北部などに生息しており、十一世紀にはこの二種の分化は完了していたものと見られる。よって魯山に住むのはツキノワグマと限定し、以下、ツキノワグマについて述べる⁽⁷⁾。

四・二 ツキノワグマの生熊

ツキノワグマは森林や藪の中に住み、体長は1・4 m ～ 1・7 m ほど。体重はオスでは50 ～ 120 kg、メスでは42 ～ 70 kg程度にしかならず、クマの中では小型といえる。雑食性であるが、主に植物食で、果実・堅果を食べる。昆虫を食べることもある。体毛が長く、色は紫がかつた光沢のある黒で、前胸に白い三日月模様があることが名前の由来である。人を襲うことはほとんどなく、むしろ避ける傾向にある。突然出くわして驚いたときや、子育て中のメスグマに遭遇したときは、人が襲われることもあるが、捕食目的で襲うことはない。木登りがうまく、木の上で採食をしたり、休んだりもする。「魯山山行」では前述の通り、「熊升樹」という形で熊が登場する。ツキノワグマであればまったく不自然さはなく、むしろ当然の光景と言えよう。なお、ヒグマは木に登ることはない。

四・三 中国の熊

ここまでは魯山の熊、と限定して述べてきたが、ここで少し範囲を広げてみたい。四・一で「魯山に住んでいた(可能性のある)熊とは」という曖昧な表題をつけたのは、実際に作者が魯山で熊を見たとの確信がないためである。しかし、魯山に限らず中国(少なくとも作者が生活した範囲内)でツキノワグマがもつとも一般的な熊であるとすれば、作者が魯山以外の地でもツキノワグマに遭遇し得る環境にあつたとすれば、「魯山山行」に出てくる「熊」がツキノワグマである可能性がより高くなるのではないか。

現在ではヒグマを「棕熊」、ツキノワグマを「黒熊・狗熊」などと呼んで区別するのだが、一九三二年に商務印書館から発行された『動物学大辞典』では「熊」の項目に「のどの部分に白色で月形の紋がある」とまずツキノワグマの特徴を述べた上で、下部項目に他の種類のクマを挙げてゐる。香港で刊行された『自然科学総合辞典』(出版年不明)に至っては「熊」の項目にはツキノワグマの特徴しか載せていない。土地柄(ヒグマの生息域からは遠く離れてい

る)も関係しているのだろうか。なお、ここには泳ぎが得意、とも記されている。一九九二年発行の『中国大百科全書』でも「熊」の項目で高耀亭氏が「(中国で)よく見られる狗熊」という書き方をしている。「熊羆」という言葉があるように、「熊」とはツキノワグマのことであり、ヒグマはいわゆる「熊」とは区別されていたのだろう。許慎『説文解字』では、「熊」の次の項目として「羆」があり、「熊に似ていて、黄白色の模様があり…」と説明されている。⁽⁸⁾なお、中国で「熊羆之士」といえば、勇敢なこと、力強いことを指す。

四、四 熊と人との関わり

人間による熊の利用法にも触れておく。一つは漢方薬として用いるものである。熊の胆嚢は解熱剤とされていて、陰干しにしてから肺、胃、肝臓など、内臓の発熱に対して用いられる。これはヒグマでもツキノワグマでもよいようである。他に、食用とされる場合もある。中華料理の高級食材とされる「熊掌」がそれで、熊の前足の裏の肉、特に左前足のものを美味とする。この部分には脂肪が多く、それを美味とするのだが、熊がハチミツを好むので、ハチミツをとって舐めたときに前足に染み込んだハチミツのために美味なのだとも言われる。熊掌に関しては中日とも古くから文献に見えており、『史記』『楚世家』⁽⁹⁾では、前六二六年に楚の成王が太子商臣に捕らえられたときに、成王は死ぬ前に熊掌を食べたいと願ったと記されている。晋の杜預は「熊掌は調理に時間がかかるので、その間に救出されることを願ったのだ」と解釈している。

『孟子』『告子章句』では「魚は私の欲しいものであるし、熊掌もまた私の欲しいものである。……生きることもまた私の欲することであり、義を守ることも私の欲することである」として熊掌を義になぞらえ、両方を得られないのであれば、魚ではなく熊掌を取り、生ではなく義を取る、とある。⁽¹⁰⁾熊掌はそれだけ貴重且つ魅力的なものであつたのだろうか。

五、まとめ「魯山山行」、熊のイメージ

以上の考察を経て、生態を根拠の中心として、当時の「熊」認識を推測してみる。

まず、四の考察でわかるように、「魯山山行」の熊描写は全く自然なものであることを記しておく。一で、しつこいほど主張したりアリズムは守られているのである。

次に、「熊」が詩に登場することの意味を考えてみる。ツキノワグマは人と接する機会が少ない。その理由には四で既に述べた、敢えて人に近づこうとはしない性質、森林や藪など人目につきにくい場所で行動する性質などの事柄も含まれるし、他には冬眠も考えられる。冬季は人間も森林に入ることとは少なくなるとはいえ、何ヶ月間か遭遇の機会がほぼゼロに近いことになるのだから、大きな要因であるというべきではないか。また、現在とは違い、食糧を求めて熊自ら人里に下りてくることもごく稀だったとも思われる。

熊の珍しさを示すためにここでもうひとつ資料として『三才圖絵』をひいておく。明代に王圻によって書かれた様々な事物を絵と説明文とで紹介する本だが、その鳥獣の巻に「熊」もある。しかし、そこに描かれているのはおよそ熊とは見えない、不思議な生き物である。説明文も正確ではなく、漢方薬として有用な（とされていた）胆囊についてさえも、「春は首に、夏は腹に、秋は左足に、冬は右足に」あるという認識だし、気を集めることができ、それを「熊経」（呼吸法の一つ）と呼ぶと言っている。これを「無知」と切り捨てるのは簡単だが、それも情報の多い現代だからこそである。現代でも実際に山奥で熊に遭遇した人といえればそれほど多くはないだろう。特に目撃者からの伝聞、その又聞きしか情報のない時代である。山奥に住んでいて、珍しい外見をしていて、滅多に見られない何か神秘的な存在（熊や熊の夢を見ると男子を授かる、との言い伝えも多分に神秘的である）、それが昔の人にとつての「熊」であり、この情報が多分に誤りを含んでいる可能性が高いという観念はなかつたのであろう。

この『三才圖絵』には、山に入ること数十里の崖や木の穴に住むこと、木に登ることも書かれている。これは今ま

でまとめたことからわかるように、実際のクマの生態と比較してもそれほど間違っていない。しかしそれよりも大事なのは、このことが明らかな間違いを含む情報とともに、当時の知識人達にとっての「常識」に組み込まれていたことである。

梅堯臣もこういった「常識」にのっとって「熊」を描いていた。熊が木に登るのは、確かに現実を反映しているといえるが、それ以上に当時の「常識」（当時の人にとってのリアリズム）に従っており、ここにおいては詩に特有の効果があるとは考えにくい。

私は当初、熊は強いもの、怖いものの象徴としての意味合いが強いと考えていたが、それはヒグマなどのイメージによるものであったようだ。これには西洋起源の伝承、物語などの影響が大きいようである（ヨーロッパではツキノワグマよりも大きく、攻撃性の高いヒグマのほうが一般的）。この考え方から見ると、「魯山山行」の「熊」は「怖いものに遭遇してしまった」というインパクトとしての役割を与えられることになる。実際、全体的に静かな環境を思い起こさせる作品であるから、一つぐらい衝撃があってもおかしくはない、と思ってしまうのであろう。そして、「熊の登場（衝撃）↓熊は樹上（距離感による恐怖の軽減）↓鹿の存在（鹿自体は怖くはない。また、鹿が水を飲めるくらい周囲は安全）」と、再び穏やかさへと情景は収束していくのである。作者は初めからこの光景全体を知っているわけであるから、熊に衝撃を受けるのは読者だけである。そして、その次に「熊がいるほどの山奥」という山深さの指標の役割、と考えてきた。

今回の結論はそれとはちがう。確かに四・三の「熊罴」の例で述べたように、熊に「強い」の意味が全くないということはない。しかし、それは「罴」と組になって生じる意味ということもあり、第一義的なものとは考えにくく、「怖い」という印象もない。むしろ、今まで副次的な効果としかみていなかった「山深さの指標」がもっとも重要なメッセージだったのではないか。つまり、「たいへんな山奥に来た。その証拠には熊がいる。めったに見ることのな

い、あの不思議な生き物がいるほどのところにいるのだ」ということである。そうなる要因はもちろん、「熊の珍しさ（稀少性）」である。山は「普段の生活空間とは異なるところ」であり、仙境もしばしば山に設定される。その山に深く入った印として、「珍しい動物」つまり「普段の生活ではなじみのない動物」が用いられるのは、実に的確な表現技巧と言つてよいのではなからうか。

そしてこの時に、詩全体を眺めてみると、最後の「人家」の存在がクローズアップされる。「こんな山奥にまで人がいる」か、「こんな山奥にいる人とはどんな人だろう（普通の人ではない）」か、いずれにせよ、「熊」が「人」を際立たせるポイントであるとすれば、突然の熊の出現もおかしくはなく、もはや「突然」ですらない。この詩は、はじめから徐々に山の奥へ奥へと進んでいく動画なのであり、すべては最後の「人家」へ繋がっていくのだろう。そうすると、俄に「雲外」の持つ役割、意味合いが非常に大事になってくるように感じられるのだが、これは他のレポートに任せることにしたい。（本レポートでは、動物名は生物学用語（和名）として扱うときのみ片仮名表記を用い、それ以外は漢字表記とした。）

注

- (1) この項のクマのデータは、『中国大百科全書』（中国大百科全書編輯委員会／一九九二年）、『大百科事典』（平凡社／一九八四年）、『動物学大百科 第一巻 食肉類』（D・W・マクドナルド著／平凡社／一九八六年）、『朝日百科 動物たちの地球 8 哺乳類 I』（朝日新聞社／一九九四年）をもとに作成した。
- (2) 『中国歴史地名大辞典』（凌雲書房／一九八〇年）、『中国地図冊』（中国地図出版社／一九九五年）、『現代中国地誌』（衛傑文、楊関坻、陸旦中、王効乾、楊伯震著 河野道博、青木千枝子訳／古今書院／一九八八年）を参照した。
- (3) 気候と植生に関しては注2にあげた『中国地図冊』、『現代中国地誌』に加え、『中国大地図』（京文閣／一九七三年）、『中華人民共和国国家普通地図集』（中国地図出版社／一九九五年）を参照した。

- (4) 『生物図説』(岩本伸一、後藤純一、小林設郎、齋藤真太郎、坪内薫、中島實／秀文堂／一九九三年)、『植生分布と環境変化』(内嶋善兵衛／古今書院／一九九三年)、『朝日百科 植物の世界13 植物の生態地理』(朝日新聞社／一九九七年)を参照した。
- (5) 『朝日百科』(注4に掲げたもの)を参考にまとめた。
- (6) 『生物図説』『朝日百科』(ともに注4に掲げたもの)による。
- (7) この項を含め、以降のツキノワグマのデータは、特に断わらない限りは注1で示した資料によるものである。
- (8) 「熊 如熊黄白文、从熊罷省聲」とある。『説文解字』(中華書局／一九七七年)より引用。
- (9) 成王請食熊掌而死、不聽。丁未、成王自絞殺。商臣代立、是爲穆王。……集解杜預曰：「熊掌難熟、冀久將有外救之也。『史記』(天津古籍出版社／一九九一年)より。
- (10) 孟子曰、魚我所欲也。熊掌亦我所欲也。二者不可得兼、舍魚而取熊掌者也。生亦我所欲也。義亦我所欲也。二者不可得兼、舍生而取義者也。『孟子正義』(焦循選／中華書局／一九八七年)より。

魯山山行における熊の役割

——過去の文学作品におけるそのイメージから考える——

安 西 明 秀

1. はじめに

梅堯臣の「魯山山行」に対する解釈において、山林の情景の中に現れる熊や鹿の当時のイメージを考えることは大きな意味を持つと思われる。この時代にそれらがどのようなものとして扱われ、詩中に登場することによってどのような効果をあげていたか。それを知るためにはさらに時代をさかのぼって、唐以前の文学作品(特に詩)にどのような形で熊や鹿が現れてきたかを理解する必要がある。このレポートでは、そのうちの熊について各時代の主要な詩作品におけるイメージを調べ、作品の中で熊が果たしてきた役割の系譜を考察することによって「魯山山行」への理解